

## 受容のブレークスルーと共感力

藤浪 武史



1980年代初頭、コンパクトディスク（CD）の登場でオーディオ界にデジタル化の波が押し寄せた。その際、「デジタル処理ができない分野では必ずアナログ処理が残る。そのため、デジタル化による高音質の進展はアナログ処理の高度化と両輪のように進む。」という記事があった。アナログ処理は時代遅れではないことが当時筆者にとって印象的であった。このデジタルとアナログを言い換えると、テレワーク勤務における対面打合せの重要性なり、おそらくAI処理におけるその初期条件設定や結果評価の重要性などにも当てはまるのではないだろうか。既存技術における障壁を新たな技術で乗り越えるというブレークスルーは、今や音楽をCDから配信に、そして小型・高密度・高機能性に移行させてきている。

一方、1990年代に入って、不都合なことを受け入れたくないという人間の意識の壁を、如何にブレークスルーするかという問題も出てきた。例えば、風水害や火山噴火災害などのハザードマップ公表に関することである。景気が良かった当時は、風評により地価が下がることを懸念し、知りたくない、知らせないという意向がはたらいた地域も多いことと推察する。「公的機関の了解を受けて開発した住宅団地の一部を、同じ機関が危険というのか。」という事例もあったようだ。近年では、地球温暖化の影響と思われる集中的な降雨とそれに伴う浸水の頻発により、ハザードマップへの住民の関心が高まってきている。これらを振り返ってみると手段や制度が受け入れられ、「伝えるから伝わる」までには少々時間が必要と感じる。

今般のコロナウイルス流行に関する感染回避行動について、ハザードマップ公表とその理解や、避難行動開始の動機とを重ね合わせて考えてみる。感染するこ

とや災害に遭遇することを他人事と考えず、どちらも自らのこととして受容し共感できることが重要である。さらに、今後の事象やその変化を自ら予測できる想像力が、感染の回避や被害の軽減につながる。感染回避行動あるいは避難行動の開始に当たり、住民のためらいは適切なタイミングを逃しがちである。そのため、ためらいをブレークスルーするにはいくつかの条件が必要である。例えば、感染回避や被害回避への高い関心（病歴や被災経験の有無など）、事象の切迫した変化（身近な人の感染、長時間の豪雨あるいは火山噴火前の有感地震の頻発など）に加え、専門家の見解に共感できることなどである。感染症流行の当初は、災害に比べ事象変化が緩いため、有名人の入院や訃報、重症化しやすい患者の特徴など、多くの情報があった。これらの情報により、多くの方々は外出自粛をはじめとする感染回避行動の受け入れに共感されたのではないだろうか。

技術開発や研究を、一般社会に広く使用されるためには、情報提供だけでなく多くの方々に理解され共感を得ることが重要と考えられる。寒地土木研究所では、防災に関して役立つ手段の開発や提供に取り組み、より多くの方々の共感を得よう努めている。例えば、浸水範囲や浸水高さを立体的にわかりやすく示した3D（3次元）浸水ハザードマップの作成技術の開発や、冬期運転時の安全な運転に直結する吹雪時の視程推定技術と情報提供などである。吹雪時により視程の悪さが予測できる場合には、外出延期という行動選択にも役立つ。

蛇足であるが、テレワーク勤務により筆者が気づいたことがある。それは、家族との会話に共感を示すことの重要性であった。このブレークスルー的転回に気づくには長い時間がかかってしまった。